



第3回

卒業生 座談会

—これからの女性研究者育成の課題—



世界で活躍する武庫川女子大学卒業生

2019年2月25日に、武庫川学院は創立80周年の記念すべき日を迎えました。現在7学部からなる本学は、2020年にはさらに3学部を加えた10学部からなる、我が国固有数の女子総合大学になります。この記念すべき年に、国内外で活躍する卒業生を迎えて、「世界で、国内で活躍する先輩から 一つながる・つなげる武庫女魂-」と題して、本学の強みとその可能性について、複眼的な視点からお話をいただきました。

登壇いただいた皆様は、本宮暢子さん（文学部教育学科卒業後、アクリン大学大学院で修士、テネシー大学大学院で博士を取得、現在アリゾナ大学 名誉教授、大阪市立大学 都市健康スポーツ研究センター客員教授、大阪市立大学 生活科学研究科 特任教授）、田村玲子さん（文学部教育学科を卒業後、セント・マーティンズ大学大学院に進学、現在、株式会社ワールドピープルUSA代表取締役）、高木絢加さん（生活環境学部食物栄養学科卒業後兵庫県立大学大学院に進学、現在、島前町村組合 管理栄養士、隠岐広域連合立 隠岐島前病院勤務）、ハリス愛子さん（文学部英語文化学科およびイスタンワシントン大学 コミュニケーション学科卒業後イスタンワシントン大学院進学、現在イスタンワシントン大学 文学部英語科 講師）の4名でした。

私たちはとすると、華々しい経歴だけを見てしまいますが、4名の登壇者のお話からは、そこに至る決意と、それを後押ししてくれた武庫川の教育、先生や仲間がいかに大切であったかという、見えない力の大切さが伝えられました。その姿は、在校生にとっても、私にも出来るかもしれないという、ロールモデルとなるものであり、勇気づけられるものであったと思います。

武庫川女子大学から飛び立った卒業生たちの姿は、本学の教育の力を示すとともに、これからのさらなる可能性を示すものであり、参加者一同、心を熱くしました。さまざまな活躍の場が皆さんを待っています。武庫川イズムを国内外に示してゆきたいものです。

女性研究者支援センターは、来年度から研究所として、さらに広さと深さを増してゆくことになります。今後さらに卒業生のみなさんとのコラボが盛んになるかと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

男女共同参画推進室長

河合 優年

2019年度 文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)

武庫川学院創立80周年記念事業

世界で、国内で活躍する先輩から

— つながる・つなげる武庫女魂 —

記

【日 時】 2019年9月28日(土) 14:00~17:00

【場 所】 武庫川女子大学 中央図書館2階グローバル・スタジオ

【主 催】 武庫川女子大学 女性研究者支援センター・男女共同参画推進室

【プログラム】

14:00 開会挨拶 副学長・男女共同参画推進室長 河合 優年

14:10 シンポジウム

卒業生

本宮 暢子 氏(文学部 教育学科卒)

田村 玲子 氏(文学部 教育学科卒)

高木 絢加 氏(生活環境学部 食物栄養学科卒)

ハリス愛子 氏(文学部 英語文化学科卒)

※学部・学科名は卒業時の名称です。

学内出席者

河合 優年 副学長・男女共同参画推進室長

藤谷 智子 教育学部教育学科学科長

高橋 享子 女性研究者支援センター長

生活環境学部食物栄養学科学科長

福尾 恵介 女性研究者支援センターアドバイザー

生活環境学部食物栄養学科教授

質疑応答

閉会挨拶

16:00 TEA PARTY

世界で、国内で 活躍する先輩から

— つながる・つなげる 武庫女魂 —

武庫川女子大学ではこれまでに約19万人の卒業生を輩出し、現在も数多くの卒業生が社会の第一線で活躍しています。今回、国内・海外で活躍している卒業生をお招きし、学内の先生方と語り合うシンポジウムを開催します。武庫川女子大学で得られた知識・経験がどのように生かされたのか、女性が活躍するための戦略などについて、事例を交えてお話していただきます。みなさま多数ご参加ください。

2019.9.28

± 14:00 ▶ 16:00

- 会 場 武庫川女子大学 中央図書館2階 グローバル・スタジオ
- 対 象 教職員・助教・助手・大学院生・学生
- 参加費 無料(申込不要)

卒業生紹介



田村 玲子 氏
株式会社ワールドピープルUSA
代表取締役
1990年 文学部 教育学科 卒業



高木 絢加 氏
島前町村組合 管理栄養士
隠岐広域連合立隠岐島前病院 勤務
2009年 生活環境学部 食物栄養学科 卒業



ハリス 愛子 氏
イースタンワシントン大学
文学部英語科 講師
2011年 文学部 英語文化学科 卒業



本宮 暢子 氏
アリゾナ大学 名誉教授
1979年 文学部 教育学科 卒業

学内出席

- 河合 優年 副学長
藤谷 智子 教育学部教育学科科長
高橋 享子 女性研究者支援センター長(生活環境学部食物栄養学科科長)
福尾 恵介 女性研究者支援センターアドバイザー(生活環境学部食物栄養学科教授)

事前申込不要

参加費無料

主催 武庫川女子大学 女性研究者支援センター・男女共同参画推進室

TEL 0798-45-3737 (内線 5073) MAIL female_r@mukogawa-u.ac.jp

メールアドレス





学院創立80周年記念事業 「世界で、国内で活躍する先輩から 卒業生プロフィール（五十音順・敬称略）」

タカギ アヤカ
高木 絢加

2009年 生活環境学部食物栄養学科卒

- 所属(職位) : 島前町村組合 管理栄養士
隠岐広域連合立 隠岐島前病院 勤務
- 学歴 : ・2009年3月 武庫川女子大学 生活環境学部 食物栄養学科 卒業
・2010年9月 兵庫県立大学大学院 環境人間学研究所 博士前期課程 入学
・2013年3月 兵庫県立大学大学院 環境人間学研究所 博士前期課程 修了
- 現在の仕事について
誰も知り合いのいない地域に入り込み、現地の人たちと信頼関係を築きながら一緒に課題を解決してきた、青年海外協力隊(栄養士隊員)の活動は私にとって一生の宝物です。そして現在は、場所を日本の僻地・離島に移し、地域と密着した医療、島にかけがいのない唯一の有床病院の栄養士として働いています。病院で働くことは、島に住むすべての人たちの健康を守ることであり、栄養士が担う役割やその必要性は大きいと感じています。現在は病院業務が中心ですが、限られたもの(資源や人)のなかで、何が地域のためになり、何ができるのかを考えながら、地域住民の健康につながる医療活動を実践していきたいと思っています。

タムラ レイコ
田村 玲子

1990年 文学部教育学科卒

- 所属(職位) : 株式会社ワールドピープルUSA
代表取締役
- 学歴 : ・1990年: 武庫川女子大学 文学部 教育学科 卒業
・1993年: Saint Martin's University セント・マーティンズ大学院(ワシントン州)
Master of Education 教育学部 修士号取得
・1993-1995年: Mukogawa Fort Wright Institute (ムコガワ・フォートライト・インスティテュート) Resident Advisor (レジデント・アドバイザー) (ワシントン州)
・1995年: Asia-Pacific Economic Cooperation (APEC)
アジア太平洋経済協力会議 翻訳担当
・1998年: Thunderbird School of Global Management
Master of Business Administration (MBA): 国際経営学部 修士号取得(アリゾナ州)
・1999-2003年: 日本テレコムアメリカ(現在のソフトバンク社): アメリカ支社勤務(カリフォルニア州、サンホセ)
・2004年1月: 株式会社ワールドピープルUSA 設立(カリフォルニア州、ロサンゼルス)
- 現在の仕事について
もっと多くの日本人、特に若い人たちに、世界の色々な機関で活躍して欲しいとの願いから、2004年に「ワールドピープルUSA(世界人)」を立ち上げ、今現在に至っています。
事業内容は、アメリカで事業を立ち上げる方や、日本からアメリカ進出される企業をサポートする『国際ビジネスコンサルティング会社』。具体的には起業に関するご相談、会社設立、起業前の市場調査、ビジネスプラン作成、就労ビザ取得、マーケティングなど、アメリカ起業に関すること全般を「ワン・ストップ・ショップ」として行っています。またアメリカ起業に必要な移民弁護士、会計士、法人銀行、PR、ウェブサイト、保険会社など、優秀で、信頼できる専門家とのネットワークも持っており、皆さんと一緒にお客様の「アメリカ進出・起業」を応援しています。

アイコ
ハリス 愛子

2011年 文学部英語文化学科卒

- 所属(職位) : イースタンワシントン大学 文学部英語科 講師
Eastern Washington University Department of English, Lecturer
- 学 歴 : ・武庫川女子大学 英語文化学科 及び イースタンワシントン大学 コミュニケーション学科 卒業。
・2017年イースタンワシントン大学院 文学研究科 英語教育専攻修士課程 修了
・本学で初めてとなるダブルディグリーを取得
- 現在の仕事について
一般教養科目English Composition(論文の書き方)の講義及び大学院助手の指導を担当。その傍らで学生教育サポート機関ライティングセンターにおいて各学部生の論文指導も行っている。
大学での研究テーマは、カリキュラム開発における現代修辞学 (contemporary rhetoric) と対照修辞学 (contrastive rhetoric)で、論文実績として2018年10月ワシントン州、2019年3月全米の学会で発表を行った。

ホングウ ノブコ
本宮 暢子

1979年 文学部教育学科・体育専攻卒

- 所属(職位) : アリゾナ大学 名誉教授
大阪市立大学 都市健康スポーツ研究センター 客員教授
大阪市立大学 生活科学研究科 特任教授
- 学 歴 : ・1975年 4月1日~1979年 3月31日
武庫川女子大学 文学部 教育学科・体育専攻
・1983年 8月15日~1985年 5月10日
The University of Akron 教育学部 運動生理学 修士
・1993年 1月2日~1994年 8月1日
Montclair State University 教育学部 栄養学科 管理栄養士
・1994年 8月15日~2002年 5月2日
The University of Tennessee 人類生態学 栄養学科 博士
- 現在の仕事について
2006年、3月 -13年前- 私は、アリゾナ大学、栄養科学学科 (University of Arizona, Department of Nutritional Sciences) の助教授/アシスタントエクステンション (Extension) スペシャリストとして加わりました。私のポジションは、健康促進と肥満対策を目的とした栄養とスポーツ・運動のプログラムを作り、そのプログラムをアリゾナ全州で実施する事、そして、地域の住民とアリゾナ大学の教員、学生が密接な連携をはかり、一体となってプログラムを運営することでした。2019年、アリゾナ大学の名誉教授になり、日本に帰国。武庫川女子大学、大阪市大、愛媛大学、関西大学、早稲田大学、千葉県立保健医療大学の教授たちと日本の学生が積極的に社会とつながりを持ち、これからの健康的な社会への発展に貢献できる様々な実践活動を提供し、世界の規模で活躍できるグローバルな人材育成に取り組んでいます。

世界で、国内で活躍する先輩から —つながる・つなげる武庫女魂—

鈴木: ただいまから、文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)武庫川学院創立80周年記念事業「世界で、国内で活躍する先輩から 一つながる・つなげる武庫女魂—」と題して、シンポジウムを開催させていただきます。私は司会を務めさせていただきます、武庫川女子大学男女共同参画推進室鈴木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。武庫川女子大学では、これまでに約19万人の卒業生を輩出し、現在も数多くの卒業生が社会の第一線で活躍しています。今回、国内、海外で活躍している卒業生をお招きしまして、武庫川女子大学で得られた知識・経験がどのように生かされているか、女性が活躍するための戦略などについて事例を交えてお話しさせていただきます。まずは本日の出席者のご紹介をさせていただきます。本宮暢子先生、アリゾナ大学名誉教授、大阪市立大学都市健康スポーツ研究センター客員教授、大阪市立大学生活科学研究科特任教授でいらっしゃいます。1979年文学部教育学科を卒業されました。続いて、田村玲子さん、株式会社ワールドビューUSA代表取締役でいらっしゃいます。1990年に文学部教育学科を卒業されました。続きまして高木絢加さん、島前町村組合管理栄養士、隠岐広域連合立隠岐島前病院に勤務していらっしゃいます。2009年に生活環境学部食物栄養学科を卒業されました。よろしくお願いたします。続きまして、ハリス愛子さん、イースタンワシントン大学文学部英語科講師でいらっしゃいます。2011

年文学部英語文化学科を卒業されました。どうぞよろしくお願いいたします。続いて、武庫川女子大学からの出席者をご紹介します。副学長 河合優年です。教育学部教育学科学科長の藤谷智子です。女性研究者支援センターアドバイザーで、生活環境学部食物栄養学科教授の福尾恵介です。そして最後に本日のコーディネーターを務めます、女性研究者支援センター長で生活環境学部食物栄養学科学科長の高橋享子です。よろしくお願いいたします。ただいまから16時まで、本日のコーディネーターの高橋享子にバトンタッチさせていただきますが、2点お願いがあります。1点目、今回のシンポジウムの様子をホームページに発信させていただきたいと思います。あるいは記録のために写真に収めることをご了承いただければと思います。2点目、会場の皆様から本日の出席者に聞きたいことをうかがって、パネルディスカッションに反映してまいりたいと思います。受付の際にお配りした質問票を途中で係の者が回収うかがいますのでご記入のうえお渡しいただければと思います。それでは高橋先生、バトンタッチいたします。よろしくお願いいたします。

高橋: よろしくお願いたします。大変短い時間ですので、早速ですが本日来ていただいています4人の卒業生に、10分ほどでご自身のプロフィールやご卒業からこれまでの成果をお話いただければと思います。まずは本宮さんから、よろしくお願いたします。

本宮: 本宮暢子です。卒業したのが40年前、アメリカに住んで30年です。40年経って、いまみなさんとこの時間を持てるこ

とをすごく幸せに思いドキドキしています。ニックネームは「KAY HONGU」です。1979年に教育学科を卒業しました。今はアリゾナ大学の名誉教授で、2019年、10月1日から大阪市立大学の特任教授として働くことが決まりました。このスライドは私が30年間で転々として来たキャンパスのロゴです。最初に、Ohio (オハイオ) のAshland College (アッシュランドカレッジ) という2000人ほどの小さいカレッジに入りました。両親とは、夏だけという約束で行ったのですが、それから30年アメリカに住んでおりました。その後アッシュランドカレッジから約1時間のところにあるUniversity of Akron (ユニバーシティオブアクロン) で修士号を取得しました。ついでに旦那さんもここで見つけました。その後帰国し武庫川で働いていたのですが、University of Tennessee (ユニバーシティオブテネシー) に博士号を取りに行きました。その後はポスドクとしてNashville (ナッシュビル) のMeharry Medical College (メハリーメディカルカレッジ) とVanderbilt (バンダビルト) で働きました。2006年にアリゾナ大学での就職が決まった際、私には、特別なタイトルがありました。Nutrition and Physical Activity Extension Specialistというものです。アリゾナの大学にはエクステンションというものがあって、私はNutrition (栄養) とPhysical Activity (運動、体育) のミッションをもってこの大学のExtension Specialist (エクステンションスペシャリスト) として雇われました。何をするかというと、大学をアリゾナ州内の地方の人たちのところへ持っていく (社会貢献する) ということです。何を

運動と栄養の教育です。その時アリゾナで一番問題となっていたのは肥満でした。肥満対策をどうするのか、研究するだけではなくアリゾナ州の人たちのところへ肥満対策教育を持っていくということが命じられました。そして、二つ目に高齢者の健康増進のプログラムを行うというミッションがありました。アリゾナ大学での、私にとっての最高のギフトは、アリゾナ大学の学生と一緒に仕事ができたとということです。この写真の彼女、Kristin (クリスティン) は、栄養士でも運動の専門家でもなくNatural Resources (ナチュラール リソース、天然資源)、環境問題の専門家です。USDAで3年間のプロジェクトを彼女と一緒に行ったのですが、高齢者ばかりが住むところへ行って「GPSを使って宝探しをして歩こう」というプログラムをしました。この写真は、プログラムを手伝ってくれたNASAインターンの学生たちです。真ん中にいるのはプログラムに参加してくれた96歳のおばあちゃんです。アリゾナで何をしてきたかと問われたら、学生を育てたということで、そして、それが私の一番のメモリーです。この写真は2012年の学会のときのものです。大阪出身の管理栄養士であり看護師でもあるこの学生がアメリカの国際学会で口頭発表しました。またこちらの彼はメディカルスクールの4年生ですが、Brain Sciences (ブレインサイエンス) のジャーナルで運動することで脳が活性化され脳の機能に効果があるという文献を発表しました。このように学生と一緒に作り上げたサクセスストーリーがたくさんあります。いま、日本の研究者と一緒にたくさんのサクセスストーリーを作っています。この写真は早稲田大学の田口先生、愛媛大学の山本先生、千葉県立保健医療大

学の島田先生です。高齢者の健康増進のプロジェクトを進めています。このように、学生や日本の先生たちのサクセス、成功、が私の宝物です。

高橋: 本宮先生ありがとうございます。40年間にたくさんの経験をしてこられて、まだまだお話しされたいこともおありだと思います。あとでまたお話しただきたいと思います。続きまして田村さんをお願いしたいと思います。

田村: 初めまして、ワールドピープルUSAの田村です。私は教育学科を1990年に卒業しまして、武庫川では密に過ごさせていただきました。私は2004年1月にロサンゼルスでワールドピープルUSAという会社を設立しました。アメリカで起業される方のコンサルティング業と不動産投資業を行っています。ビジネスコンサルティング業では日本人および日本企業のアメリカでの起業支援をしています。私は5歳の時にそろばんを始め、そろばん10段、暗算10段です。高校から武庫川で、この写真に写っている姉と、二人の姪も武庫川にお世話になっております。この写真の右側に写っているのは地主先生です。卒業する年の1月、卒業後の就職も決まっていたのですが、ランチを食べている時地主先生から「田村、お前はそろばん10段で日本一というレベルなのに、なぜもっといろいろなことをしないのか」と言われ、「たとえばこういうことをするとか」といくつか挙げられました。その中に、「アメリカに行って教育の修士号を取りながら算数のできない子にそろばんをボランティアで教える」というものがありました。その一言がきっかけで、私は英語もできなかったのに家に帰って両親に「アメリカに行く」と言いました。最初に武庫川の姉妹校であるワシントン州にあるセント・マーチンズ大学院

で勉強しました。最初は英語も話せなかったのですが、ソロリティというアメリカの女の子ばかりのクラブに入りました。大きなそろばんを持って行って、小学校、大学、また教育番組にも出演して、そろばんの使い方を教えました。これは卒業式の写真です。セント・マーチンズはカトリック系なので牧師さんも一緒に授業を受けていました。卒業した後に武庫川フォートライトのレジデントアドバイザーとして2年間勤めました。約200人の武庫川の学生が来ますが、4人のレジデントアドバイザーが住み込みで4か月間、50人ずつの学生の世話をします。ここでもそろばんを教えていました。そのあとアリゾナのサンダーバード大学院へ行きました。そのきっかけとなったのは、レジデントアドバイザーとして勤務している時にアメリカ人のレジデントアシスタントに「あなたはサンダーバード大学院に行ったほうがいい」と言われたことです。そこは国際MBAなので当時約90カ国から学びに来ておりたくさんの友達できました。その時友達になった人たちといまも一緒に仕事しています。若い日本人たちにアメリカで活躍してほしいという願いがあり、2004年にワールドピープルと名付け会社を設立しました。仕事内容は、アメリカで起業をしたいという個人あるいは企業に対して起業に関するコンサルティング、アメリカでの会社設立と登記、英文ビジネスプラン作成、アメリカ就労ビザの取得サポート、マーケティング戦略、というのが一連の流れです。同時に、アメリカで汚い家を買って手直しをするという不動産投資の仕事もしています。

高橋: ありがとうございます。アメリカでのすばらしいご活躍、あとでまた楽しみにお聞きしたいと思います。続きまして高木絢

加さんをお願いいたします。

高木: 久しぶりの方、そして初めましての方、高木絢加といいます。私は2009年に武庫川女子大学食物栄養学科を卒業しました。生まれはうどんで有名な香川県です。武庫川女子大学の食物栄養学科に入ったのは、栄養士になって野球選手と結婚したかったからなのですが、その夢はまだ実現できていません。卒業後は兵庫県立大学の大学院で修士を取得し、その後大学助手として再び武庫川女子大学でお世話になっています。学生引率でフォートライトに行って、海外への興味がより強くなったこともあり、2016年から2年間、JICA海外協力隊としてフィリピンに行き、栄養士隊員として活動しました。現在は島根県の隠岐にある小さな地域病院で管理栄養士として働いています。まずはフィリピンでの2年間の活動を紹介させていただきます。JICAボランティアという名前で聞かれたことがある方も多いかと思いますが、JICA海外協力隊とは、開発途上国へ行って、地域の人たちと一緒に生活し、同じ言葉話して現地の人たちの生活がより良くなるよう協力するボランティアです。私はフィリピンに行ってピサヤ語という現地語と英語を話し、栄養不良を改善するための活動を行ってきました。私がいたのは、観光地としても魅力のあるセブから船で2時間ほどのところにあるボホール州というところにある保健所です。そこで栄養士として活動していました。ターシャという小さなメガネザルがいたり世界遺産のチョコレートヒルズがあったりと自然豊かなところ。何よりも人がとても温かく、私はボホール人の笑顔は世界一だと思っています。全世界で、5歳の誕生日を迎えるまでに亡くなってしまふ子どもの数は560万人と報告されています。そ

の半数以上は栄養不良が関係しているといわれています。フィリピンでも子どもの栄養不良は大きな問題の1つであり、出生1000人当たりの5歳児未満死亡率が27と、日本の3に比べても多いことが分かります。この子は5歳ですが、私は初めて会った時、その見た目から2歳くらいかと思いました。ひどい低身長・低体重で、脳に障害もありうまく話すこともできません。本土から船で1時間ほどの離島に住んでいる子なのですが、日本の離島とは違い、水が十分でなかったり、トイレがなかったりと衛生状態も悪く、感染症が蔓延しているようなところ。お腹がぼっこりしているのは、お腹の中に寄生虫がいるからです。この子がいくら食べても寄生虫が栄養を吸収してしまい本人は成長できないという問題が起っています。さらにこの子の母親も低栄養で、栄養問題の複雑さをこの子から学びました。同時に、もっと早くになにかできなかったのかと思うようになり、それが活動のきっかけになりました。病気の早期発見・予防につながり、そして栄養不良で亡くなる子どもを救える、Child Growth Assessmentという子どもの成長をサポートするプログラムに出会い、それに係る活動を行いました。これは日本でいう乳幼児健診のようなもので、定期的に身長や体重を測るものです。基本的なことですがとても大切なプログラムです。WHOによるガイドラインもありフィリピンでも実施されているはずなのですが、当たり前のごとで重要視されていない現状がありました。2年間、実際に現地で感じたことやデータから問題を見つけ出し、子どもの栄養問題の改善に携わるという貴重な経験をさせてもらいました。私になにかをするというより、本当にたくさんのことをフィリピンから学ば

せてもらいました。中でも人との出会いから学ぶことが多くありました。日本人だからなのか、「頑張らない」と考えすぎてしまうものですが、フィリピンでの上司であったラリーさんからの「まずは自分が幸せでないと周りを幸せにはできないよ」という言葉は私の宝物になっています。そして現在は島根県にある隠岐島前病院で働いています。隠岐諸島は本土から船で2時間ほどのところにあります。大きく島後・島前に分かれています。世界ジオパークにも認定されており自然豊かです。私がいるのは島前で、西ノ島、中ノ島、知夫里島の3つの有人島からなります。人口約6千人で高齢化率は43.8%です。島根県自体高齢化率が高いのですが、島は特に高くなっています。私がいるのは西ノ島というところで、島間はフェリーで移動します。島前には雄大な自然、牛や馬もたくさんいます。島ならではの文化もたくさん残っています。亀の手、新鮮な魚、アワビ、カキ、めかぶやわかめなど、海の幸も豊富です。この図は島前地域の医療機関を示したものです。隠岐唯一の有床機関である隠岐島前病院が西ノ島にあるとともに、診療所、歯医者も各島にあります。私は隠岐島前病院で管理栄養士として働いています。直営の給食施設なのですべて自分たちの施設で行います。給食管理業務では、献立を作成したり調理をすることもあります。そして食材発注・納品。栄養管理業務としての業務は、入院患者の栄養管理、外来患者の栄養指導、NST委員会、そして病院だけでなく地域での健康教室などを通じて予防活動なども行っています。これは平均健康寿命（65歳自立期間）のグラフですが、島根県のデータに比べて島前地区には元気な高齢者が多いことがうかがえます。現在は緑

あって国立保健医療学院の研究課程に所属し、遠隔で研究指導を受けています。今後は「離島・僻地における健康・長寿に影響を及ぼす栄養学的要因の検討」といった研究を通じて島に暮らす人たちの幸せにつながるができたらと考えています。

高橋: ありがとうございます。フィリピンでは幼い子どもたちの栄養問題、そして現在は高齢者の健康寿命・長寿に関する研究と、「栄養」をキーワードに活躍されているということがうかがえました。それでは続きましてハリス愛子さんをお願いしたいと思います。

ハリス: こんにちは。ハリス愛子と申します。私はいまアメリカのワシントン州にあるイースタンワシントン大学で英文科の講師として勤めています。この7月に初めて出産し、2カ月になりますが、親になる大変さをひしひしと感じています。今回は短い帰省なので、子どもと夫、そして私の両親をアメリカに残して一人で帰国しました。飛行機の中では久しぶりの快眠でした。私は2006年に武庫川女子大学 文学部英語文化学科に入学しました。1回生の時に兵庫県が主催している洋上大学、洋上セミナーに参加しました。3カ国を船で回って船上で講義を受け現地訪問するというものです。海外に足を踏み入れるということで「自分対世界」という世界観が生まれ、その後国際交流センターが主催しているホストファミリー制度で留学生を受け入れたり、分校のフォートライトへ留学もしました。海外での教育を受けることで学問や知識へのハングリー精神がでてきて、帰国してから、先生方、事務局のみなさんのご協力を得てダブルディグリー（二重学位）のプログラムを設立し、2011年に武庫川女子大学とイースタンワシントン大学の

学位を取得しました。大学生時代は学問だけでなくいろいろな活動をしていました。バレーボール部に所属し西海岸での大きな大会で優勝し、MVPに選ばれました。高校時代の死に物狂いでの部活生活が花開いたことを誇りに思っています。また、留学生アドバイザーとしていろいろな国からイースタンワシントン大学にくる学生さんのお世話をするアルバイトをしました。そして2012年から2015年にはMFWIでレジデントアドバイザーをしていました。いろいろな学部生のお世話をし、英語教育のプロフェッショナルのもとで働くことで、私も教える立場に立ちたいと思い大学院への進学を決めました。大学院では英語教授法を専攻しました。入学にはお金がかかるので、給付型奨学金に応募したところ通りました。TAとして働く代わりに学費は全て免除され、さらに手当がでるというもので、2年間の学費免除に加え教員経験を得ることができました。2年間授業を持っていたのですが、留学生ではなくアメリカ人学生に対して論文の書き方やリサーチの仕方などを教えていました。学生の論文を評価していて、文章表現や言葉の意味が異なってくることに面白さを感じました。社会的要因や文化的、経済的要因によって文章に違いが出てくるのです。それがきっかけでもっと研究したいという野心がでてきました。ちょうど卒業する所に講師のポジションがあり、その審査に受かって今講師として働いています。個人では、言語表現、文章表現がなぜ変わるのかというのを英語教育と結び付けて研究しています。日本でも英語教育が重視されていますが、社会的要因、文化的要因と必ず関連があると思います。共同研究でも同様の研究をしており、全米、あるいは州内の学会でも発

表し研究活動をしています。今後は自分の得た経験や知識を教え、先生を目指す学生の支援をしていけたらと思っています。

高橋: ありがとうございます。武庫川でダブルディグリーを取得された第一号だと聞いています。その後もステップアップしていかれる様子をお話いただきました。まだまだお話があるかと思いますので、後ほどお願いしたいと思います。

鈴木: 会場の皆様、お配りした質問票にご記入くださっていましたら、回収させていただきますので合図をお願いします。

高橋: それでは、もう少し追加で、今日までのプロフィールの中でのターニングポイントや、例えば武庫川女子大学で学ばれたことでこういうところがよかった、あるいは武庫川との縁についてなど、何かありましたらお話したいかと思います。本宮さんからよろしいでしょうか。

本宮: ターニングポイントというよりはスタートポイントなのですが、アメリカに行くスタートを決めたのは担任の清水先生のお言葉でした。私は英語が好きで、とにかく英語を勉強したかったのですが、「英語がいくらできてもだめだ。あなたは体育ができる。まずは体育でやってみなさい」と言われました。初めはよくわかりませんでした。「体育はみんなができるものではないし、好きな人もいれば嫌いな人もいる。あなたは体育が好きで、できるのだから体育で一番になってみなさい」ということで、オリンピックに出られるわけでもないしどうしたらいいのだろうかと思いましたが、とにかく、オハイオのアクロン大学で運動生理を学びました。英語を勉強するのではなく、英語をツールとして使って修士を取ることになりました。そのスタートポイントを担任の先生にいただきました。これは

すばらしいことだと思います。私の人生が変わりました。武庫川女子大学が担任制であるということのすばらしさだと思いますが、清水先生が私のことをよくご存じであった。それがあったからこそ、今の私があると思っています。

高橋: ありがとうございます。清水先生と本宮さんに信頼関係があり、的確なアドバイスでスタートラインに立ったということですね。本学には開設時から今日に至るまで担任制度がありますがそれが十分に活かされた。田村さんはいかがでしょう。

田村: 私の恩人は地主先生です。私は、200人の中から1人選ばれて大和ハウスの秘書課に就職が決まっていました。地主先生はそのこともご存じでしたが、1月に「5歳からそろばんを17年間やっていて日本一になるほどのレベルの人が、その能力・才能をどうして人のために使わないのか」と言われました。アメリカの子どもたちは算数が苦手なので、算数には筆算やそろばんといろんな方法、ツールがあるということ子どもたちに教え、自分もツールとして英語を学ぶ。地主先生の言葉がターニングポイントとなっています。武庫川の先生方のおかげで、そして家族に助けられてここまでこられました。

高橋: ありがとうございます。本宮さんに続いて田村さんも、やはり担任の先生や恩師がキーパーソンですね。続きまして、高木さんはいかがですか。

高木: 私は武庫川女子大学で4年間学んだあとに、助手として呼んでいただき、3年間働きました。助手という経験を通じて、学生に自分の経験をもっと伝えたいと思うようになりました。海外には前から興味がありましたが、そのことが協力隊への一歩を踏み出す大きなターニングポイン

トとなりました。また、協力隊として知らない国へ行くという時、とても不安でしたが、先生方がいつも「困ったことがあったらいつでも連絡してくれていいからね」と言ってくださり、大きな心の支えになっていました。卒業後も大学との縁が続いているというのは私にとってとてもありがたいです。

高橋: ありがとうございます。高木さんは私の研究室出身です。武庫川に帰ってこられたのがターニングポイントだったかなという気がいたします。ハリスさんはいかがでしょう。

ハリス: 1回生の時から自分の中で意識改革が起こったのですが、それは大学に学生支援サポート、きっかけづくりがあったからです。そこに私が飛び込んで行き、それが以後につながっていると考えています。また、ここにフォートライトの授業で読んだ1冊の本がありますが、フォートライトの教育でいまにつながっているのは、考える力を身につけたことです。作者はどういう意図でこの本を書いたのか、また文章表現についてなど、学生、先生と討論をする。声に出す、そして考える時間を与えてもらったということがとても大事だと思いました。それから、ネットワークです。二重学位を経てイースタンワシントン大学やコミュニティを知る時間を与えられ、その時間は今の基盤となっています。自分がいまイースタンワシントン大学で働けているのも、二重学位を通してイースタンワシントン大学の先生方、地域の方々と出会い、情報交換ができたということがつながっているのです。武庫川女子大学で得た経験がいまとても役に立っています。

高橋: ありがとうございます。私もEWUに行かせていただいたのでハリスさんのご活躍を知っています。先生方とのつながりを

大事にされていると痛感します。それではここで本学の先生方からみなさんへのご質問をいただきたいと思います。河合副学長いかがですか。お願いします。

河合: 本学は女子大学です。教育の内容は共学であっても女子大であっても同じであるかもしれませんが、女子大であったことの強みは何でしょうか。みなさんのお話を興味深く聞かせていただいでいて、人のために働くということと人のつながりということがありましたが、共通していたのは「えいや!」ということ。その「自分で決める」ということは武庫川の強みのような気がします。武庫川で学ばれたことで自分の人生に影響したことがあれば教えてください。個人の特性であったのかもしれませんが、公江先生がつくられたこの大学の精神がみなさんに何か注入されたのではないかと私は思います。実際に荒波に飛び込んで行き、活躍されているみなさんに、その決心について、これから本学が100周年に向けて新しいことを進めていくこの時に教えてくださいたいと思います。

高橋: ありがとうございます。それではハリスさんからお願いします。

ハリス: 私が思うには、女性だけの環境イコール安心。またお互い高めあう意識が生まれ、女性の社会的な位置づけというのを忘れさせてくれるというのがキーとなっていると思います。

高木: 考えたことがなかったのですが、先生がおっしゃったように「えいや!」精神で来たと思います。女子大でよかったと思うのは、朝の時間が短縮できたことです。服などに気を使わずにすみ、良くいえばありのままで先生や友人と接していられた。その分いろんなことが吸収できたと思います。

河合: 私も「先生として」とか「父親として」と

か考えますが、そういうものを置いておくことができる、ありのままの自分でいられるということは大事だと思います。

田村: 私が武庫川で学んだ精神は、素直です。「ありがとう」、「ごめんなさい」と言える環境であったと思います。素直でいると、人がいろいろなことを教えてくれます。また、助けてもらえるし、許してもらえる。素直である人と人に好かれ、人が集まってきました。ビジネスにおいても、ビジネスがビジネスをするわけではなく人がビジネスをするので、うまくいくと思います。素直さ、やさしさ、人をほめることができる気持ちというのが大きいと思います。

本宮: 私が体育科（男っばい女子の集まり）にいたからということもあるかもしれませんが、学生時代は「女子大」にいるという感覚がありませんでした。いまこの質問を受けて初めて実感しました。みなさんがおっしゃったように素直でいられたということだと思います。体育科の学生は周りの学生をよく見ていて、お互いに自分ができること、できないことがわかっていて、かばいあえるファミリーでした。それに強いです。ちょっとくらいのことでは負けませんし、学生時代に泣いているのを見たことはありませんでした。

河合: ありがとうございます。特に「女子大」にいると感じないでいられる。横並びで、英語であったり体育であったりそれぞれの専門のことについて語れる。装わないで本音のところで考えて、「えいや!」と飛び込んでいけたということですね。ありがとうございます。

高橋: 本日は教育学科ご出身の方が二人もいらっしゃると思いますので、教育学科学科長の藤谷先生、ご質問をお願いします。

藤谷: 今日はいいお話をお聞かせいただき、来てよかったと思いました。ありがとうございます。今回「つながる・つなげる武庫

女魂」というテーマを最初に拝見した際に、「武庫女魂」とはどういうものを指すのだろうかと自分なりに考えてみました。先ほどの河合先生のご質問に対するみなさんの答えは「素直でいられる」、「ありのままでいられる」ということでした。本学の教育環境について、ある意味でお褒めの言葉をいただいたと思っておりますが、すべての方が活躍できるということではないと思います。教育環境とみなさんがもともと持っている強みや志向性がマッチしたからこそ花開いたのだと思っています。ですから、みなさんそれぞれの、他の人にはない強みをアピールしていただきたいと思います。またリーダーシップをどこで身につけられたのかということをおうかがいしたいと思います。武庫女の強みについて、先ほど本宮先生からも「強さ」というのを言っていたきましたが、ポキッと折れるような強さでなくしなやかな強さが持ち味だと思っています。それはどんなリーダーシップを身につけるかということとも関係していると考えています。一人が「ついてこい!」というものではなく、それぞれがリーダーシップを持っていてそれを適切な時に出し合い、高め合っていくというようなことを学生時代に経験して培われたのではないかなと想像しています。「強み」、「リーダーシップ」についてお聞かせいただけたらと思います。

高橋: 本宮さんからお願いします。

本宮: 強みといえば、「ちょっとくらいではあきらめない」ということでしょうか。アメリカに行って、初めは話すことができませんでした。英語の読み書きはできてても話すことができず、「Yes」といってしまうのがこわかったのでなんでも「No!」と言っていました。「ノーガール」といわれていましたが、そこから30年アメリカに

住んでいたということは、あきらめなかったということなのだと思います。だから「あきらめない」というのが武庫女魂だと思います。それから、日本に帰ってきて感じるのは、卒業生がたくさんいるということです。“石を投げれば武庫女の学生に当たる”というくらい、私と同年代の人たちがいるんなところで働いて、「武庫女だよね、がんばろうね」となり、それも私の強みになっています。武庫女魂イコール私の強みです。

田村: 私の強みは一つのことをコツコツと続けることだと思います。それはそろばんで培ったものですが、持続するということは力になります。リーダーシップについては、ビジネスをしていて、特に起業、不動産投資となると98%、99%は男性です。女性であり日本人である私はマイノリティです。その中で、男性になろうとしない。張り合うのではなく女性としてのよいところ、得意なことを活かす。何が得意かといえば、3つあると思います。1つめにコミュニケーション能力の高さがあります。相手が何を望んでいるのか。人と人とのふれあいが大事なので、例えばメールよりも電話をする、電話でもだめなら会いに行き表情を見ながらお話をする、というようなことが女性のほうが得意だと思います。2つめはマルチタスク、同時に複数のことを器用に行うことができます。仕事でもリーダーとして複数のことを見ていかなくはいけません。その力は女性が優れていると思います。最後に女性はやさしく、あたたかく、丸い、かわいい、ということです。女性のそういったところが強さであり、それを活かしていくというのが私なりのリーダーシップです。

高木: 私自身、まだいろいろと悩みながら前に進んでいる途中で発展途上なのです

が、人より少しポジティブシンキングであることが強みだと思います。つらいこと、大変なことも日々たくさんありますが、ポジティブに考えると物事は楽しいと思えて、その場を楽しめます。リーダーシップについては、私はこれまで与えられたことをこなしていくという感じでしたが、いま離島の病院で働いていて代わりがおらず自分がやるしかないという状況にあるので、これから身につけていかなくてはいけないと思います。お二人のお話を聞いていて勉強になりました。

ハリス: 私の強みは継続だと思います。「継続は力なり」で、バレーボールでも英語でも続けていくということが大事だと思います。また、よく考えて、落ち着いて相手と話すというコミュニケーション力が自分の強みだと思います。リーダーシップについては、「渡り鳥の理論」というものがあります。先頭の渡り鳥には風が強く当たるのですが、周りがそれを察知して順番に入れ替わっていきます。そのように場面によって自分がリーダーシップを取る、あるいは譲るということが本当のリーダーシップであり、私も過去にそういった経験があってそこで身についたのかなと思います。

藤谷: ありがとうございます。私自身もどのようなリーダーシップを身につけたらいいのか悩んでいる最中ですが、強いリーダーではなくみんなで支え合いながら、というのはとてもすてきだと思います。そういうものを目指すと同時に、積極的に強みを活かすということも忘れてはいけないと思いました。

本宮: リーダーシップについて言い忘れていたのですが、2006年にアリゾナ大学で働き始めた際、一人の先生がリーダーシップについて教えてくださったことがあります。現在国連で働いているその先生か

らは、みんなを引っ張っていくにはトップダウンのリーダーシップでなくボトムアップのリーダーシップを目指しなさいと言われました。トップダウンで「こうしなさい、ああしなさい」ということはすぐにはできません。本当のリーダーとは、みんなと話し合いコミュニケーションを取って何が必要なかをまず聞いてわかってから、リーダーシップを取っていくのだということを教わりました。

藤谷: ありがとうございます。本宮先生もそれを身につけていらっしゃるのだなと思いました。

高橋: ありがとうございます。続きまして福尾先生からご質問をお願いします。

福尾: 私も2年間アメリカに留学した経験がありますが、最近は留学する日本人が少なくなっていると感じています。本学でも、フォートライト等、条件は良いのに留学する学生が少ないのはどうしてだろうかと考えますが、いまいろいろヒントをいただきました。本学はアメリカ分校を持っていますが、担任の先生に言われてもなかなか行く勇気が出ない。実際に行動に移すにはどうしていったらいいのかと思います。具体的には、例えばアメリカに運動生理を勉強しに行かれたということでしたが、日本にもそれを勉強できる大学はあるのに、どうしてアメリカに行こうと思われたのかという部分、そして実際にアメリカに行って良かったことは何かというのを聞きたいと思います。学生から見れば、ここにいるみなさんが特別なのではないかという思いもあると思います。壁を破れるようなアドバイスをいただければ一歩踏み出す勇気を持つきっかけになると思いますので、そういったことを教えてください。

田村: 最近は特にインターネット等で行った気になったり見た気になったりするという

ことが多いと思います。しかし実際に見るとのは大違いです。行った人、経験した人から具体的な話を聞けば、そういうチャンスがあるのだとピンとくるのではないのでしょうか。先生、先輩から具体的な話をさせていただき、質問ができれば変わってくるのではないかと思います。

高木: 私はフィリピンで経験したことを何度か大学生、高校生に話す機会があったのですが、講義の最後に行ってみたい人に手を挙げてもらうと半数くらい挙がります。具体的なものが見えると興味があるのでないか、また、将来どういう可能性があるのかというものがわかると踏み出しやすいのではないかと思います。

ハリス: 日本では学べないこと、アメリカで得られるものは何かというと、私はネットワークだと思います。その機関、学校、職場の人たち、またその人たちとつながりのある人たちと出会うことができる。海外に足を踏み入れると、日本にいたら出会うことのない人と出会えます。そのネットワーク力はいろいろなことを実現するにあたって重要になってきます。日本に留まっていたら2~3年のビジョンでも、海外のネットワークを構築するうえで何十年後の自分が想像できるということが大きいと思います。

本宮: 40年前に一歩踏み出した時、私が何を考えていたのか、いま考えても何も浮かんできません。何も考えていなかったのかもしれませんが、ただ、40年前はアメリカといったら未知の世界でしたが、いまは海外も身近になってきていると思います。興味さえあれば一歩踏み出せるのではないのでしょうか。自分の世界を広げたい、自分をもっとできる、もっとやりたいという気持ちさえあれば、一歩踏み出せると思います。

田村: もう一つ、おそらく今の人たちはとても

堅実なのだと思うので、「これをすればこういう結果がある」と先生方が示してあげると効果があるような気がします。

福尾: ありがとうございます。

高橋: ありがとうございます。会場の方からのご質問をいただいています。7名の方からの質問があり、すべてお尋ねすることができるかはわかりませんが、一つずつご質問していきたいと思います。まず、本宮さんとハリスさんへの質問です。「女性研究者として、研究環境やライフイベントとの両立について、アメリカの大学と日本の大学の違いは何だと思いますか」ということです。いかがでしょうか。

本宮: 私の主人もオハイオで博士を取っていて、日本とアメリカの大学を卒業しています。ライフワークとしては、私は普通でないのかもしれませんが、40年間主人と同じ屋根の下で生活したことがありません。このたびお互いリタイアして初めて一緒に住むことになりました。とても仲が良く、毎日FaceTimeをしていてラブラブです。大学でどうやって自分のしたい研究をしていくかといえば生活はバラバラでもお互いが分かり合って好きなことをしていくということで、それはアメリカの大学であろうと日本の大学であろうと一緒だと思います。

高橋: 日本の大学とアメリカの大学との違いはどこだと思いますか。

本宮: 日本の大学はきっちりと決められたことを習得していく、アメリカの大学では自分の好きなことがあればいろんなところへフローしていけるというところが違うような気がします。

高橋: ありがとうございます。ハリスさんはいかがですか。

ハリス: 女性特有の結婚・出産ということを研究者としてどう両立していくかということで、ちょうど私は7月に出産したところ

です。アメリカの大学は夏休みが3カ月と長期ですが、9月から学校が始まったときにどう両立していくか。アメリカと日本の大学の大きな違いは、アメリカでは通信制の教育がとても充実しているところとあります。私はいま在宅勤務をしていて、すべての授業はオンラインです。子どもの世話をしながら仕事ができ、SkypeやFaceTimeなどを使用して自宅から学会発表もできます。そういった柔軟性が大きな違いではないかと思えます。

高橋: ありがとうございます。やはり大きく違えますね。そうすると結婚・出産されても、家庭と仕事が両立できるということですね。

続きまして、会場からのご質問です。「今の学生の多くに見られるのは自分に自信がないという意識です。国際比較でも日本人の特徴のようです。みなさんにはそういうところがまったく見られませんが、自分に自信を持つには、みなさんのような行動力を持つには、どうすればいいでしょうか」というご質問です。自信がないという学生に対するアドバイスをお願いします。

ハリス: もちろん自分に自信がないと感じるときも多々あります。そこで重要なことは、自分の強みも弱みもすべてを受け入れることです。受け入れないと、自信がないままになって何も進まないと思えます。私の場合は自分を振り返って、弱みも強みも両方受け止めるように、時間をかけて考えて、自分がどうしたいのかを文章にするなどしています。

高木: 私はあまり自分に自信がありません。自分に自信をつけるため、自分を好きになるためにしているのは、いろんなことを経験するということです。経験が自信につながると感じるのので、本当にいやなことはいやと言いますが、それ以外は「イ

エス」で頑張っています。経験することでいろんなことを学べ、伝えられます。自分の知識も増えますし、自信につながっていくと思えます。

田村: 誰でも一つは得意なこと、好きなことがあると思えます。もし自分の得意なことがわからなければ、ワクワクすること、難なくできること、それを思うと楽しくなること、苦痛を感じないこと。それを一つでいいので、深くやっていくとその一つにまず自信がついて、そこからどんどん大きくなっていきます。スポーツでも料理でも勉強でも何でもいいので、まず一つ何が好きか、何が得意かを見つけれれば、誰でもそこから自信が生まれてくると思えます。

本宮: 彼女の言われた通りだと思います。私のところにも大学生がたくさん来ますが、最初からコンフィデンスを持っている学生なんて一人もいません。その子たちの興味のあるものを引っ張り出すことは私たち、先生の役目だと思います。まず学生が何に興味を持っているかがわかるようなものを投げていき、学生が興味がある何かをつかむまで投げ続けます。好きなものをキャッチしたら、どんどん伸びていきます。これは私たち大学で働く者の役目だと信じています。

高橋: おっしゃる通り、それは教員の大切な役割だと思います。他にもご質問があります。「海外で仕事をすると行った時の家族の反応、あるいは反対された時どう説得されましたか」ということです。みなさんどうですか。反対されたのでしょうか。本宮さんいかがですか。

本宮: 40年前、私の両親は大反対でした。「夏だけ」と嘘をついて行きました。そのあとどうしたかという、アメリカでできた友達に一生懸命説得してもらいました。ネットワークがあったというのが大き

かったと思います。

高橋: 田村さんはいかがですか。

田村: 私も一日で決めた留学ですから、父は無言、母は泣く、という感じでした。ただ行かせてもらったお礼として、きっちりと勉強して、ボランティアもして、修士号を取って、というのを見てくれているうちにだんだんと納得して、助けてくれました。

高木: 私の両親も初めは反対でした。インターネットでフィリピンのことを調べると、テロの情報なども出てきてしまうので、すごく心配だったと思います。それでもどうにか説得して行き、2年間で終わって、その経験を両親の前で発表する機会があったのですが、それをきっかけに両親も変わりました。「行ってよかったね」と、いまではJICAボランティアの大ファンになっています。私が実際に成長したというのを実感してくれたのだと思います。

ハリス: 私の場合は、言い方が悪いかもしれませんが、親に動機づけさせました。いきなり「留学する」というとびっくりすると思ったので、1回生の時の洋上大学やホストファミリーなどで、海外へ目を向けてもらえるように家庭内での意識改革をしていきました。少しずつ知ってもらおうようにしていたので、親も反対しませんでした。

高橋: 少しずつということですね。ハリスさん個人への質問なのですが、「元々英語がネイティブレベルだったのですか」ということです。

ハリス: まったくの日本人です。フォートライトへ留学するまでまったく英語は話せませんでした。

高橋: そのほかにもいくつかあります。「海外に行かれて、結婚・出産への心配はありませんか」というもので、本宮さん、ハリスさんはご結婚されていますが、田村さん、高木さんいかがでしょうか。

高木: すごく悩みます。自分のキャリアを築いていく中で、どのタイミングで結婚出産するのか。私は家庭を持ちたいですし子どもも産みたいのですが、両立は難しいのではないかと思います。人が足りていないところで働いているので、仕事をして、帰って子育てをして、自分の研究をしてとなると、また海外に行きたいとも思っているのですが、どのように組み立てていくのかをいま悩んでいる真っ最中です。

高橋: ありがとうございます。そのほか、会場からご質問やアドバイスなど何かありますでしょうか。

藤谷: 教育学科の教員として田村さんにおうかがいしたいのですが、修士は教育学で取られたのですよね。その後、経営学に向かうというとき自分の中でどのようなことがあったのか、教育と実質は変わらないのかもしれませんがそのあたりをどう考えられたのかをおうかがいしたいと思います。というのも、教育学科は教員を養成する学科ではありますが、実際にはそうではない道を選ぶという人も増えてきているという傾向にあります。それでも私たちとしては、教育学科で学んだことがそのあとの人生に何かプラスに働いていってもらわないと困るわけです。ですので、どのようにとらえられているかをおうかがいしたいです。

田村: 私は教育、ビジネス、人、という3つのことが好きです。なぜ私が教育学から経営学へ行ったかという、私はフォートライトで働いた経験から、留学、外国人、アメリカ、海外というものが好きでした。自分の好きな教育とビジネス、アメリカと日本、ということ考えた時、ビジネスをしていくうえでは教育だけでは世間的に認められないというところがあるので、それであればMBA。それも国際で携わりたかったと思ったので、全米で一番

のサンダーバードを選んで行きました。今このビジネスをしていてもセミナーをする、アメリカでの起業のお手伝いをする、というとき、教育というのは常につけてきます。授業をするというのではなくても、先生という立場から従業員を見るという目も持ちました。教育学部での学びがまずベースにあり、そのうえでビジネスというものがあります。教育は人生においていつも必要なものだと思います。

藤谷: 逆に、先生になることしか考えていないという方に対してのメッセージはありますか。

田村: 先生というのは、すごい仕事だと思います。教育、人を育てるといのは、これ以上の大変なことも、時間のかかることもないと思います。人格を育てるといことはすばらしい職業であり、それに向かう方というのは本当にすばらしいと思います。

藤谷: 単に「教える技術」でなく、人を育てるといことをしっかり大学で身につけられるように、私たちもそういう教育をしなければいけないと思います。

田村: どんな先生に会うかというのはその人の人生に大きく関わってきます。私たちの人生も変わりましたし、先生は子どもたちの希望でもあると思います。

高橋: ありがとうございます。会場からですが、「4人の方は英語が非常に上手ですが、日本の英語教育について何か一言あればお話しください」ということです。

ハリス: 日本の英語教育によくあるパターンは、文法、リーディングといったいわゆる受験英語というものです。そうすると英語をツールとして使うことができなくなります。日本人の留学生を見ていると確かに読み書きはよくできるのですが、リスニング、スピーキングはできない。何が問題かという、英語を教える先生がそうい

う経験を経てこれらに教壇に立っており、そういうサイクルが続いているということです。英語教員になりたいという先生がどうやって英語を使う環境にいられるか、そのためのきっかけづくりができるか。経験を経た先生が教える英語はツールになると思います。

高木: 私は英語を話せませんが、将来のために勉強したいと思っています。フィリピンの人は母国語であるタガログ語と、島によって違う現地語と英語を勉強していて流暢に話します。日々生活の中で使っていて、読み書きはできなくても話せてコミュニケーションはとれるのですごいなと思います。答えにはなっていませんが。

田村: 日本の英語教育はすばらしく、英文法にしても、単語3000にしても、それだけ覚えていれば話せます。ただその「話す」ということだけ練習できていないのだと思います。最近では小学校から英語が入っていると聞きますので、これはとても大きいと思います。ネイティブの人と小学校から接していることで「外国人」と恐怖感を持つことなくいられるということはプラスでありとてもすばらしいことだと思います。

本宮: 日本の英語教育はずいぶん変わったなと感じます。英語を「嫌いじゃないけど、うまくない」と感じている子どもたちが多いようです。私の友人などで英語を教えている人たちは、そういう子たちに「私もうまい、できる」と思わせるようにしているそうです。一緒に遊ばせてうまくなるようにしていると聞きます。

高橋: ありがとうございます。まだいくつか質問があるのですが、高木さんに質問です。「先ほどフィリピンの子どものお腹に寄生虫がいるというお話がありました。アレルギーやアトピーの症状はありますか」という質問です。

高木: あるとは思いますが、まずは低栄養を改善する、体重を増やすことということに意識がいくので、そこまで判断できていないのが現状です。ただ、フィリピンの学会に行くとアレルギーという題目も見られるので、あると思います。

高橋: 最近では、お腹に寄生虫がいたらアレルギーになりにくいという説もありますが。

高木: フィリピンでは年2回寄生虫を出すための薬を飲むのですが、離島ではそういう薬が十分に行き届いていなかったり、飲んででもまたすぐに寄生されたりという状況もあります。

高橋: ありがとうございます。そのほかに会場からご質問はありませんでしょうか。

内田: キャリアセンターの内田といいます。自信を持つためには、なにか夢になれることや好きなことを見つけたらいいということでした。しかし、学生の中には好きなことが見つからない、趣味がないという人もいます。今後は変わっていくのかもしれませんが、これまでの高校までの教育は、正解主義というのか、すべてにおいて正しいか正しくないかということと判断するということがあると思います。自分の考えていることを言っているのか、これは正しいのだろうか、と考える。正解にとらわれず「私はこう思う、なぜならこうだから」というところまでいけばいいのですが、「正解かどうか」で終わってしまうのです。アメリカではそのあたりはどうなのでしょう。

田村: おっしゃるように、アメリカでは正しいかどうか、コレクト／インコレクトではなく、ディファレントというのをよく言います。同じものを見て、ある人からすれば正解であってもまた別の人からすれば不正解ということがあるわけです。そのように、「違う」ということを受け入れるような教育方法、あるいは社会です。同じ

ものでも、正しいか正しくないかは見る人によって変わってきます。アメリカの子は「自分はこう信じたからこう動きました」というように核となる部分があり、自分の中での判断をしっかりと持っています。日本では世間一般での基準、常識によって判断しているといえるので、自分にとっての正しい判断ができるのであれば好きなこと、得意なことが見えてくるような気がします。

本宮: アンケートをとったこともありますが、20%くらいの学生は何がしたいかわからないと答えました。そういう学生がたまたま私のところに来ればラッキーで、「私は変わっているから何でも聞いていいよ」と言えばぼつぼつと出てきます。とても時間はかかりますが、初めに何をしたいのかわからない学生のほうがおもしろいことがでてくることがあります。時間と、つながりが重要です。いろんなところへ一緒に行ってコミュニティに出て、一人でやってごらん、と言えぱしっかりやります。時間も、学生を見る目も必要で、簡単な公式はないと思います。

ハリス: アメリカの大学では、1・2回生は一般教養をとっていて、3年生から自分の学部を決めます。私が教えているのは1回生、2回生ですが、彼らは自分が何をしたいか何に興味があるかわかっていません。わかっている人のほうが珍しいです。そこでどうしているかといえば、キャリアセンターと私で、学生が何をしたいか、夢を見つけられるようにカリキュラムを組んでいます。自分と向き合って、自分が何をしたいか考える時間を設けてあげないと、自分の進みたい道というのはなかなか決められないと思います。アメリカでは就職活動というものがなくて、大学生は時間があり学問に集中できるというのが基盤にあるという点でも大き

く違うと思います。

高橋: ありがとうございます。

先ほどみなさんがおっしゃった「武庫女魂」という言葉を聞いていて、日下晃先生が卒業式でおっしゃっていた3つの言葉をふと思い出しました。「誠実であれ」「謙虚であれ」「努力をしろ」というものです。毎年卒業生にそれらの言葉を贈られていました。今日みなさんから、あきらめない、努力する、継続する、あるいは、武庫川の強みとして卒業生の仲間がたくさんいる、優しさがある、リーダーシップを譲り合うという気持ち、そういったことを聞いた時、私たちは知らず知らずのうちにそれを身につけて、みなさんもそれを持って社会へ飛び立っていったのだという思いがしました。今日は助手の方も何人か来られています、これから社会に出て活躍したい、貢献したいという後輩に、みなさんから一言ずつアドバイスをお願いします。

本宮: もし困ったことがあったらまわりを見てください。武庫川女子大学の卒業生がたくさんいます。絶対に助けてくれます。それが武庫女魂です。

田村: 私が一番言いたいのは、自分の好きなこと、得意なことを見つけて、自分の向かいたいところに向かってくださいということです。もしできるなら、自分のいたい場所で一緒にいたい人と仕事をすると自分の最大限の力が発揮されるんじゃないかと思います。頑張ってください。今日はありがとうございました。

高木: 今日はありがとうございました。私も助手をしていたので、助手の大変さはよくわかります。研究活動はすべての基礎になります。現場で働いているとその大切さがわかります。忙しいと思いますが、時間を見つけて楽しむことも忘れずに。応援しています。そしてこれからもよろしく

お願いします。

ハリス: 「グローバル」というどうしても海外に拠点を置くと考えてしまいがちですが、決してそうではないということ伝えてたいです。グローバルに活躍するというのは、自分の意識改革を起こす、世界に目を向けるということであって、それは日本にいてもできることです。どういう形で自分が世界に目を向けて活躍するのか、ということであるので、固定観念を捨てて意識改革を行ってほしいと思います。

高橋: ありがとうございます。みなさんの言葉はご自身の経験・体験からにじみ出てきたものだと思います。若いみなさんが、今日の言葉を励みにこれから頑張ってくれると思っています。今日はカリフォルニアから、ワシントン州のスポケーンから、そして国内といえども海外ともいえる隠岐島から、そして本宮先生も、お時間のないところシンポジウムにご出席いただき、短い時間でしたが大変充実したたくさんのお話を聞かせていただきありがとうございました。まだまだ話は尽きませんが、みなさんの今後ますますのご活躍とご発展を願っております。今日は本当にありがとうございました。温かい拍手をお願いいたします。

鈴木: 本日は「世界で、国内で活躍する先輩から 一つながる・つなげる武庫女魂—」にご参加いただき本当にありがとうございました。ご登壇いただいた卒業生のみなさまには、遠方からお越しいただきありがとうございました。今一度盛大な拍手をお願いいたします。

引き続きまして、ささやかですがティーパーティーを行わせていただきたいと思います。1時間ほどを予定しております。お時間の許す方はぜひご参加いただければと思います。本日は本当にありがとうございました。



編集後記



令和元年度文科省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)の事業として「世界で、国内で活躍する先輩から」の座談会を開催しました。さらに、本学の80周年を記念とした座談会でもありましたので、サブタイトルに「つながる・つなげる武庫女魂-」を加えました。私たちが紹介しました4名の卒業生は極々一部で、開学から80年間の卒業生19万人がロールモデルでもあります。

登壇頂きました本宮暢子さんは教育学科・体育専攻卒、田村玲子さんは教育学科卒、高木絢加さんは食物栄養学科卒、ハリス愛子さんは英語文化学科卒と文系理系にかかわらず、それぞれの専門分野から世界に飛び出て活躍されています。現在の立場や活躍は本文の中に記載されていますが、ここに至るまでの道のりについては、多くの努力といくつもの壁を乗り越えてこられたようにお聞きしました。講演では、それぞれの立場で本学の教育の本質、出会った恩師、そして大学で一緒に学んだ友人達のことを熱く語って頂きました。講演会場では、武庫女で学んで良かったなとか、あー学ぶことは楽しいとか、武庫女の自由な空気感が幸せだったなとかの幸せ感が溢れていました。

武庫女で学ぶことの意義やメリットは、学びの喜びや苦しさ、厳しさを共有できる友人が多く存在し、武庫女の自由な雰囲気の中かでクラスや集団で自分の役割を果たすことを学び、そしてすぐそばにロールモデルがあることではありませんか。

武庫女の大学・短大の枠や学科の枠に囚われない友人・先輩・後輩との交流、専門の学問観、教育観、職業観、結婚観、食事観、ファッション観そして将来の夢などの様々な話題を熱く語りあう自由な環境がそこにあります。そのようななかで、お互いの価値観や考え方を認め合う武庫女の精神と人・もの・環境に対する思いやりが武庫女イズムを形成しているように思います。卒業時には、また会う約束をしてそれぞれの道に進み、何年後かの再会時には武庫女生徒に戻っている。これぞ、武庫女魂や武庫女イズムをつながる・つなげるということだと思います。

卒業生の背中を世界へ押したのは恩師や友人の力もあったと思いますが、それぞれの卒業生が与えられた処で必要とされ求められる人材に成長することができたこと、これが武庫女の教育だと思います。約19万人の卒業生と1万人の在学生の計20万人がロールモデルでありワンチームとして武庫女イズムで繋がり90周年、100周年と継続して活躍し発展していることを願っています。

女性研究者支援センター長

高橋 享子



発行日 2020年2月

武庫川女子大学女性研究者支援センター

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46 武庫川女子大学 中央キャンパス内
TEL : 0798-45-3737 FAX : 0798-45-3535

